

随筆

虹を探して

久保 敦司

人はいつ死ぬのか―この三年間、私は母の介護の中で、幾度となくこの問いを繰り返してきた。

約三年前、九五歳になって間もなく母に乳がんが発覚した。進行性で、告知をされてから二か月後にはリンパ節、さらに三か月後には肺に転移した。

私は下関生まれだが、高校卒業とともに上京し、四十年以上東京で暮らしていた。だが母のがんの治療のために東京を離れ、下関に戻ることを決めた。告知から半年後のことである。そこから二年十か月に及ぶ介護生活が始まった。残念ながら私には蓄えがなかったため、介護は経済的な逼迫をもたらした。眠れぬ夜が続き、心は疲弊し、身体は重くなった。今年の一月まで自宅で介護を続けたが、母は動けなくなり、救急車で入院した。それから半年間、母は寝たきりになったが、驚くほど明るく気丈で頭もしっかりしていた。ところが病識がなく、自分の状況を理解できていなかったが、痛みをほとんど感じていなかったのは幸運だった。平日、私が見舞いに行かないと、私の身に何かあったと思い込み、スタッフに迷惑をかけるので、私は毎日病室に通い、母に追従して明るく「来たぞー」と声をかけ続けた。

「人はいつ死ぬのか」それは死生学のテーマではない。三年をかけて徐々に崩れていく母の姿を見つめながら、明日の暮らしをどう立て直すかに追われ、眠れぬ夜に、消しても、消しても浮かんできた問いだった。

私は母に育ててもらったことを感謝し、親孝行は当然のことと考えていたので、住み慣れた東京を去ったことも、自分の生活を犠牲にしていることも仕方のないことと思っていた。だが、医師

や看護師から聞かされる厳しい状況と、「なぜ、そしていつまで、ここに居なくてはならないのか」と泣きながら訴える母の言葉に、心が引き裂かれた。家に帰り、夜空を見上げるたびに、「どうか母が苦しまないで逝けすように」と祈った。やがて、「もう迎えに来てほしい」と願う自分を見つけ、そんな祈りを恥じ、戒めた。人の死は、これほどまでに過酷なのか。「人はいつ死ぬのか」その問いは、私自身の未来をも曇らせ、暗い澱みをもたらした。

ある日、母が尋ねた。

「（私の経営する）カフェは繁盛しちやる？」

「ああ、しとるよ」と答えた。それは嘘だった。平日は見舞いに追われ、店は土曜日にしか営業できなかったからだ。

「行きたいわあ」と微笑んだ。「私、看板娘になれるわよ」と笑った。

「皆んな、喜ぶぞ」と私は返した。希望を渡すために絞り出した言葉だった。介護とは、相手の命を支えるために自分を削ることなのだと思った。

ひと月前、母が逝った。

その日は朝から母は苦しそうに眠り続けていた。呼吸は浅く、顔には痛みが滲んでいた。私は耳元で「ここに居るぞ」と大きな声で言った。すると瞼は閉じたまま不安そうに「あっちゃん」と私の名前を呼んだ。

「ここにおるよ」と頭を抱いて答えると、今度は優しく、安堵した声で「あっちゃん」と呼び、口角を上げた。そのまま母は静かに息を引き取り、微笑みを残したまま旅立った。

介護の日々、突然の豪雨の後に空が晴れ渡ることが幾度もあった。私はそのたびに「虹が出る」と思い空を探した。虹は晴れと雨の境界に架かる。昔の人は境界を畏れた。昼と夜の境界を「逢魔が時」と呼ぶように、境界は変化のエネルギーを孕むため、災いを引き起こし易いと考えたからである。関門海峡も境界の地と

いえる。潮が変わり、風が変わり、天気が変わる。北九州では大雨でも下関は晴れている。そんな体験を下関の住人はよく体験する。

私にとって虹とは、この世とあの世の境界に架かる橋のように思える。なぜなら虹は見惚れるほどに神々しく美しいからだ。私に救いを与えるのだ。こちらがこの世なら、向こうはあの世。こちらが雨なら、向こうは晴れ。こちらが苦しみならば、向こうには希望がある。母が最期にくれたものは希望だった。あれほど長く、ゆつくりと、残酷に、苦しい経過を辿ったにもかかわらず、最期は安寧に包まれ、微笑みながら死んだ。その微笑みこそが神々しく、死や病の醜さをすべて上書きしてくれた。看護師が母に薄紅を差してくれ、私は、「綺麗な人だった」と胸の奥で呟いた。その微笑みですべてが報われたと感じ、初めて嗚咽が忍び出た。

人はいつ死ぬのか。その答えはまだ分からない。でも、その時が来たら、穏やかに虹を渡ることができると、母が最期に教えてくれた。虹の向こうにあるのは光なのだと。私は今日も空を仰ぎ、虹を探している。